

資料5

火山噴火予知連絡会  
第8回 火山活動評価検討会

日時：平成21年3月26日（木） 10時00分～11時30分

場所：気象庁講堂

出席者：石原（座長）、池内、伊藤、根本（国土地理院 今給黎委員代理）、植木、大島、  
鍵山、川邊、藤井、山里、横山、渡辺、中川、中田

オブザーバー：（国土地理院、内閣府）

事務局：北川（貞）、舟崎、宇平、山際、山崎、加藤、井上（気象庁火山課）  
荒井（砂防・地すべり技術センター）

○資料1（中長期的な噴火の可能性の評価について）前回からの修正点を説明

前回1月23日の検討会の後、委員から何点か予め質問および要修正の指摘を受けた。今回はその結果も反映させたものである。

（質疑・応答）

- ・ 「防災対策をとる時間スケールを考慮」という言葉の意味がわからない。
  - 自然災害のリスク評価では、30年超過確率や100年超過確率といった時間スケールをよく耳にする。それが常識的なスケールとして社会に認識されているのであれば、火山だけ桁の違う発生確率で評価をしても理解されないのではないかという危惧がある。
  - 中小河川では30年、大きな川だと100年といった規模を出しているが、これはあくまで施設の整備目標に使う確率に過ぎない。例えばオランダでは1万年スケールのリスクまで考慮している。国内でも地震であれば小さな確率を考慮している。対象となる現象が与える被害の大きさによって考え方は変えてよいのではないか。
  - 「火山学的に評価できる精度や防災対策をとる時間スケールを考慮して」という文言は、外すこととする。
- ・ 「評価の対象としない火山」から、渡島大島と若尊は外した方がよい。無人島ではあるが、過去の噴火に伴う津波で対岸に人的被害を出していることや、夏には人がいる可能性もある。
  - 「選定に当たっての残された課題」の部分に、渡島大島と若尊を追加して、「無人島や海底火山についても居住区に影響がある可能性がある火山もあるので今後検討が必要」と記すことにする。また、「評価対象とする火山」の文面から「防災対策の観点から火山を選定する目的」と「居住区に影響が及ばない火山」を削除する。
- ・ 各火山の評価の文面について、水蒸気噴火とマグマ噴火の別を記載しているが、この記載は必要か。
  - この資料1だけで説明するのであれば、水蒸気噴火とマグマ噴火は区別して示すべきである。地震の場合も海溝型と内陸型で区別して示している。
  - 100年、200年というオーダーの噴火の可能性評価であればマグマ噴火、10年、

20年なら小さな水蒸気噴火も評価するということにしてはどうか。

- 小さな噴火を探しているのは、その後の大きな噴火の前兆なり発生確率を評価するためでもある。
- 個々の火山でわかる範囲で分けて記すということにする。例えば有珠 1910年の噴火は、(マグマ貫入)と書くことにする。
- 各委員に確認した上で記すことにしたい。なお、全ての噴火について区別して書けるわけではないので、「主なものは」のように記す場合もあることを了承願いたい。
- ・ 「活動している火口の社会的条件」という表記は修正すること。
- ・ 岩木山は【作業3】で選定されるのではないか。岩木山にも【作業3】で選定されている富士山と同様の選定根拠がある。
- ・ 青ヶ島は「噴火した場合、早急に避難する必要がある」と修正すること。また、過去にマグマ噴火があったということは記述しておくべきである。
- ・ 九重山については、水蒸気噴火についてコメントすべきである。
- ・ 雲仙普賢岳について、図1の選定手順で考えると【作業1】もしくは【作業2】で選定されるのではないか。
  - 上記を含め、他の火山との関係もみながら、気象庁で再検討する。選定理由だけでなく、噴火履歴についても記載することにする。
- ・ 有珠山の1973年噴火の際には3~10日の前兆があったが、1977年噴火では30時間しかなかった。防災対策の観点から誤解を与えないよう配慮した表現とすること。
  - 1回の噴火で発生したことが、その火山を代表するような表記になっていると、leading timeを見誤る可能性があるので特に配慮が必要である。
  - 具体的に〇〇年の噴火の際には〇〇〇であったと書くか、〇〇という噴火が〇回あるなどと書くとよい。

#### ○その他

- ・ 天頂山、雄阿寒岳、男体山について、3山まとめて公表の予定。タイミングは検討中。
- ・ 次回5月頃を予定している。

以上